

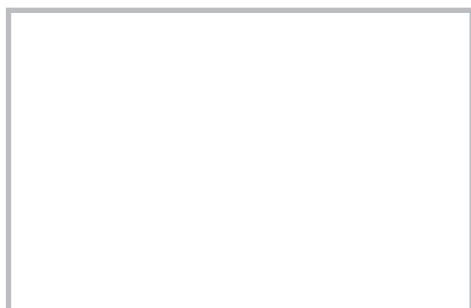


図 16.16 光線性花弁状色素斑 (pigmentatio petaloides actinica)
尋常性白斑 (中央部) に対する PUVA 療法施行後に生じた例。



図 16.17 色素異常性固定紅斑 (erythema dyschromicum perstans, ashy dermatosis)
灰青色斑の皮疹および皮疹辺縁に紅斑性皮疹を認める。

ともある (図 16.17)。まれに瘙痒を伴うことがあるが、多くは自覚症状を欠き、慢性に経過する原因不明の疾患。薬剤誘発性あるいは扁平苔癬^{たいせん}の一型として本症に一致する皮疹が生じることがある。

C. 異物沈着によるもの diseases caused by extrinsic deposition

16

1. 柑皮症^{かんぴ} carotenosis (cutis), aurantiasis cutis

定義・病因・症状

血中カロテン濃度が上昇した結果、角層および皮下脂肪組織にカロテンが沈着して黄色調を呈するようになったものである (図 16.18)。手掌足底などの過角化部に目立つ。顔面 (前額、鼻翼、鼻唇溝など) にも色調変化が現れることがあるが、強膜などの粘膜に生じることはなく、汎発化することもほとんどない。自覚症状はない。一般に、血中カロテン濃度が 0.5 mg/dL を越える状態が 1～2 か月続くと症状が出現する。この高カロテン血症 (carotenemia) はカロテン含有食物 (柑橘類、カボチャ、ニンジン、ホウレンソウ、ノリ、トウモロコシ、卵黄、バターなど) の大量摂取や肝機能障害 (カロテンがビタミン A に代謝されず、血中カロテン濃度が上昇)、脂質異常症 (カロテンは脂溶性のため、脂質異常症により血中濃度が上昇しやすい) による。

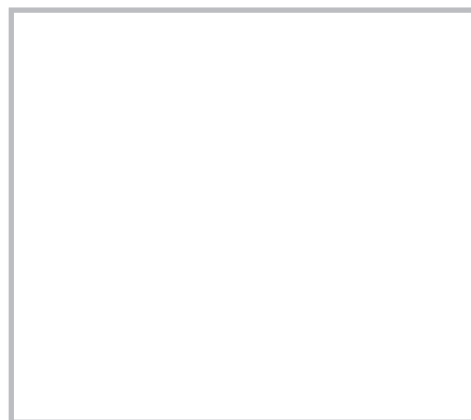


図 16.18 柑皮症 (carotenosis, aurantiasis cutis)
手掌の黄色調変化。

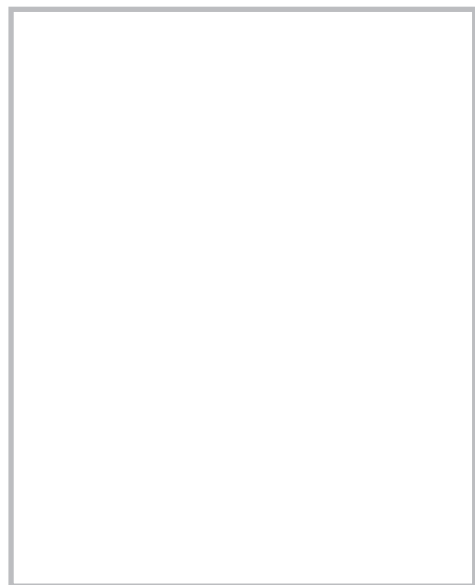


図 16.19 刺青 (tattoo)
いわゆる“入墨”。さまざまな色調が混在している。



図 16.20 外傷性刺青 (traumatic tattoo)

診断・治療

黄疸との鑑別を要する。黄疸では強膜の黄染化，掻痒，肝機能異常がみられるため容易に鑑別できる。原因食物の摂取を制限すれば2～3か月で自然治癒する。

2. 銀皮症 argyria

定義・病因・症状

銀製医療器具（銀針，縫合糸，歯科充填材）の使用や銀含有食品の長期摂取により生じた限局性および全身性の銀沈着症である。日本では仁丹[®]，欧米では銀含有の薬剤により発症した報告が多い。汗腺や弾性線維などに銀化合物が沈着し青灰色を呈する。全身性では日光露光部である顔面や頸部，前腕部で生じやすい。

診断・治療・予後

皮膚生検で茶褐色の微細な顆粒塊を認め，顆粒成分の微小部蛍光X線分析で銀にピークをみることで診断する。有効な治療法はなく，さらなる銀の摂取を控える。本症と発癌などの疾患とのかわりはない。

3. 刺青^{しせい} tattoo

いわゆる“入墨”。人為的に色素や墨を皮膚に刺入し，絵や字を描き出したものである（図 16.19）。文身ともいう。転倒などで偶発的に異物が真皮などに入った場合は外傷性刺青 (traumatic tattoo) という（図 16.20）。色素は主に真皮上層に存在するが，一部はマクロファージに貪食され，リンパ流を経てリンパ節に沈着する。刺青の合併症として，色素によるアレルギー反応や，光線過敏症を起こす場合がある。色調によりレーザー療法が有効なことがある。